

私は、ハンセン病患者になった。ただ、それだけで、語り尽くせない苦しみや、悔しさを味わいました。社会と政治の理不尽にもだえてきました。そういう経験があったからこそ、得られたものがあつたのも確かです。そのことを裁判闘争は、私に教えてくれたのです。

差別と偏見をなくす社会づくりのために、辛い現実から逃げるな、と自分を叱るもうひとりの自分……。その自分を叱る自分……。私の中にいる幾人もの自分……。

心の殻を打ち砕かなければ、人間のサガともいうべき差別・偏見が芽生える心を、この世からなくすことはできない。政治を、社会を変えるためには、まずは私自身が変わらなければならぬのだ、とね、自分に言い聞かせているんですよ。

私が乗り越えなければならぬ、最後の壁なのかも知れません。

私はいまも忘れることができないのですが、二十二年前の昭和六十年に当時の西ドイツ大統領のワイツゼッカーさんが、第二次世界大戦終結四十周年に際し、「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも盲目になる。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです」と、自国の侵略行為を反省して歴史を直視する姿勢で、世界に向かって「荒れ野（あれの）の四十年」と題して、演説した言葉に感銘しているんですよ。

私ができることは、ハンセン病の実体験者として、歴史の事実を検証して、過ちを二度と起こさせない社会をつくるために、生き証人として語っていくことだなあ、と思っっているんですよ。

微力であつたとしても、それが真に人間回復を実現する取り組みだと思っています。人間と人間の絆を結びえずして、人間回復の完成はありえないでしょうから……。

療養所入所者の平均年齢は、七十九歳を越えましたよ。

裁判に勝利してから、早いもので、数年の歳月が流れましたねえ。

裁判と一緒にたたかった僚友も、一人、二人と先に逝きましてねえ、寝床に就くと、ふうっと、虚脱感のような感情が襲ってくるのを禁じえせんねえ。

残り少ない人生、死ぬまでがんばらねば、と奮い立たせるわが心と、いつお迎えが来るのやら、との寂しさに襲われる気持ちが錯綜するこのごろなんです。

半世紀をゆうに超える歳月を療養所で暮らして、ここはやつぱり、第二のふるさともなりましたよ。ここが終の住み処に、と考えるのは贅沢なことでしょうか……、間違いでしょうか……、いけないことなのでしょうかねえ……。

辛い、悲しい思い出しが残っていないふるさとであっても、懐かしいあのふるさとへ、もう一度帰りたいなあ、という思いが重なり合って、ジグザグに心の中で、行ったり来たりするんですよ。

父母のお墓の前で掌を合わせて、菊の一本も手向けてから、この世とおさらばしたい、との強い思いと同時に、高齢になって、目も不自由になり、杖を使わなくてはならないからだになり、いま暮らしている長島愛生園は第二のふるさとであり、ここで、歓びや悲しみを分かち合ってきた仲間たちに囲まれて、静かに息を引き取りたいとの願ひも強くなつてきます、正直な気持ち。

こういう気持ちは、療養所で暮らすハンセン病元患者のささやかな、共通した人生終末期の願ひであり、迷いでもあるんですよ。嘘も隠しもない本音ですよねえ。

でもね、私はこうしてね、みなさんと話し合えることが、本当に嬉しいんですよ……。

私にはね、妻はいないし、もちろん、子も孫もない……、私の子孫はいないんですよねえ……。それを思うと、切ないし、悔しいし……。

でもね、私には仲間がいてくれたんですよ、たたく仲間たちですね。諦めないで、慰めや、ほどこしに溺れないでね。宗教の善意は大切にしていますけどね、どうしても限界があると思うんですよ、宗教には。

人権を回復させるためには、憲法を活かす政治・社会につくりかえねばならないと、考えているんですよ。私は、いつも顔をあわせる長島愛生園の仲間をはじめ、志を同じくする全国の僚友に励まされてきたんですよ。

私に、帰るふるさとなさがない、家族がない、そういうハンディはあっても、何十人、何百人もの仲間と心を紡ぎ合うことができたなあと喜んでいらっしゃるんですよ。その仲間たちを、私は、同志と呼んでいるんですよ…。

それから、裁判で勝ったということは、日本の国民は見捨てたもんじゃないなあ、勇気を振り絞って、よかつたんだなあ、と思っっているんですよ。